

現代ロシアの政治変容と地方：沿ヴォルガ地域における圧倒的一党優位の成立過程, 1991-2011

著者	油本 真理
学位授与年月日	2013-09-24
URL	http://doi.org/10.15083/00006295

【別紙 2】

審査の結果の要旨

氏名 油本 真理

本論文は、体制転換後のロシアにおける政治の変容を、地方レベルの動向に注目して描き出そうと試みた作品である。この時期のロシア政治は、1990年代の安定与党不在状況から2000年代の圧倒的一党優位状況へと、巨大な変化を経験した。この変化は、従来、政治制度の変更、政治と社会の関係、経済情勢の変化などといった要因によって説明されてきた。しかし、著者は、それらの要因は変化の大きな背景を説明するにとどまり、その実際のプロセスやメカニズムを十分明らかにするものではないと指摘する。そこで著者が注目するのが、ロシア政治の変化を下支えしていた地方エリートたちである。地方レベルの行政府およびそれと密接な関係にあったビジネス界はロシア政治の実働部隊ともいえるべき存在であるが、そうした地方エリートの動向の具体的な事例に即した説明が本論文の主要な課題となっている。

本論文は、序章、第一部「前提」（第一・二章と補論）、第二部「実証研究」（第三 - 六章）、終章という構成からなっている。

序章においては、まず、安定与党不在から圧倒的一党優位へという変化がどのようにして生じたのかという問題が提示され、これを理解する上で地方レベルの政治に着目することの重要性が指摘されている。その主要アクターとしては、州行政府・州都行政府・共産党地方委員会の三者があり、これらの相互関係探求が本論文の主要課題となっている。フィールドワークの対象としては、沿ヴォルガ地域に属する四つの州が選定されている。

第一部は実証研究に入る前の前提事項の説明にあてられており、二つの章と補論からなる。第一章「地方政治の基本構造」では、先ず、前史としてソ連時代最末期からソ連解体直後にかけての政治が地方レベルに力点をおいて叙述され、その後のロシア政治の基本条件が明らかにされている。ソ連時代末期に既に一定の分化を遂げていた地方エリートは、体制転換に伴う再編をこうむりつつ、市場経済移行に伴う困難な課題を担わなければならないが、そのことは、以後の地方政治の背景をなしている。

第二章「ロシアにおける地方政治の位置」では、中央地方関係を律する制度および財政制度がとりあげられ、そのいずれにおいても2000年代に制度的集権化が進行したことが示されている。もっとも、制度的集権化は必ずしも予期通りの効果をもったわけではなく、中央による地方コントロールには一定の限界があること、地方行政府は集権的制度的下でも政策履行における一定の裁量を有していることが指摘され、地方エリートの役割が確認されている。

補論では、政党法および選挙制度を中心とした政治制度の概観が行なわれている。政治制度は本論文の主要対象ではないが、以下の実証研究にとって前提的知識をなしていることから、簡潔にその要点が示されている。

実証研究の成果をまとめた第二部では、まず冒頭に序がおかれ、主要資料の説明やフィールドワーク遂行の概要が述べられている。以下の各章は一つの章に一つの州を割り当て

る形で構成されているが、すべての章を同じ形で組み立てることにより、それらを相互に比較しやすくする工夫がなされている。

第三章ではサラトフ州が取り上げられている。この州においては、1990年代に親エリツィンの立場をとったアヤツコフ知事が強固な支配を築き、州都行政府も共産党地方委員会も早い時期に周縁化された。このように「一人勝ち」状況を実現した州行政府は、1990年代末（全国与党形成を目指す動きが始まった時期）には、とりたてて全国政党と結びつく必要性を強く感じるものがなく、政党形成はあまり活発でなかった。その後、全国与党となった「統一ロシア」がこの州にも浸透を試みたが、当初、州行政府はこれと距離をおき、すぐには合流しなかった。しかし、2003年以降に与党の浸透が強まると、潜在的野党勢力が早くから周縁化されていたせいもあって、そのスピードは速く、この州における圧倒的一党優位状況は他州にまして強烈なものとなった。

第四章で取り上げられているウリヤノフスク州の場合、1990年代に反エリツィンのガリヤーチェフ知事と共産党地方委員会がともに左派的立場をとり、左派勢力内の主導権争いを演じるという構図があった。この州では、州都行政府の重みは大きくなかった。主要勢力がそろって連邦中央政府に批判的であることから、全国与党に連なる動きは当初微弱だった。しかし、左派的な州行政府による「市場経済への軟着陸」路線が限界を迎えると、この州の政治は大きな混乱に陥った。空隙をついて浸透を始めた「統一ロシア」は急速に地歩を固め、モロゾフ新知事と良好な関係を築き上げた。こうして、圧倒的一党優位状況がこの州でも出現したが、2011年に「統一ロシア」の支持に蔭りが出はじめ、共産党が復調傾向を見せたことに示されるように、与党の優位は盤石ではない。

第五章はサマーラ州を取り上げる。1990年代の同州は、経済自由主義路線をとるチトフ知事が強力な支配をしき、共産党地方委員会を周縁化していた。しかし、それとは別に、州都行政府が州行政府の有力なライヴァルとして存在していた。1990年代末から2000年代初頭にかけては、州行政府と州都行政府がそれぞれに政党形成に積極的に関与した。もっとも、地方エリートの全国政党との結合は多分にご都合主義的なものであり、有力政治家がその忠誠対象を変更する例は珍しくなかった。2003年以降、「統一ロシア」が全国与党としての地位を固めると、地方エリートもこれに連なるようになったが、党中央と現地党組織の間でも、また州行政府と州都行政府の間でも対抗関係は解消せず、外面的に優位となった「統一ロシア」は多くの内紛を抱え続けた。一時的現象ではあるが、州都行政府を第三政党「公正ロシア」が掌握したことがあるという事実も注目される。

第六章で対象となっているヴォルゴグラード州では、1996年の州知事選挙で共産党員のマクシュータが当選し、州行政府と共産党地方委員会が提携関係になる一方、州都行政府がこれと対抗するという構図が生じた。1990年代末以降に全国与党に連なろうとしたのは州都行政府だが、この動きは当初、種々の困難にぶつかり、なかなか成果を上げられなかった。「統一ロシア」が全国与党としての地位を固めるにつれて、この州でも同党の浸透が進んだが、党内での内紛が続いたばかりでなく、2011年下院選挙では共産党が復調傾向を見せるなど、与党の支配は多くの不安定性を抱えている。

以上のフィールドワークをうけて、終章では本論文全体の総括が試みられている。四州の動向を比較するとき、州都行政府が州行政府の有力なライヴァルとしての位置を占めた州とそうでない州とでは、政治過程の展開の仕方が大きく異なっているというのが第一の

指摘である。共産党地方委員会の役割は時期と地域によって異なり、一般化することが難しいが、他の条件が近い州同士を比べると、共産党地方委員会の強弱がそれぞれの州の政治に一定の特徴を与えていることが観察できる。こうして、「統一ロシア」の圧倒的一党優位という限りでは各州に共通の趨勢がありながら、その具体的形成プロセスや、外見的優位状況にはらまれる秘かな弱点の実態は州ごとに異なる。

ロシアの地方エリートは、安定与党が存在しなかった 1990 年代には全国政党と結びつこうとしなかったし、全国与党形成が始まった時期にも、直ちに雪崩を打った動きを示すことはなかった。しかし、いったん圧倒的一党優位が全国レベルで確立すると、地方エリートはこぞって与党に加わり、そのことがこの時期のロシア政治の変動を特に強烈なものとした。とはいえ、自己利害をもちつつ与党陣営にはせ参じた地方エリートは、その後も「統一ロシア」内での抗争を続けており、そのことは条件次第で新たな流動の要因ともなりうる。本論文の内容をこのように振り返った終章は、最後に、この研究がより広い比較政治学にとってもちうる理論的含意に簡単に触れ、さらに本論文の限界と今後の課題を確認して閉じられている。

以上が、本論文の概要である。

本論文の長所としては、以下の三点を挙げることができる。

まず、最大のメリットは、課題設定の大きさと重要性にある。この時期のロシア政治がドラスティックな変化を経験したということ自体は周知の事実だが、従来、ややもすれば「権威主義化」が自明の結論とされがちで、この変化がどのようにして起きたのかを具体的に明らかにする作業はほとんどなされてこなかった。そうした研究状況に照らすとき、この重要問題に正面から取り組み、全国政治と地方政治を結びつけて一つの見取り図を提出したことの意義はきわめて大きく、現代ロシア政治研究にとって重要な収穫である。

第二に、地方政治の実態を明らかにするために、四州にわたるフィールドワークを行ない、しかも州レベルのみならず、主要な市にまで降りて丹念な調査を遂行しているという点が挙げられる。各州に共通の時期区分を設定し、主要アクターも州行政府・州都行政府・共産党地方委員会の三者にそろえ、各章を斉一的な構成にするなど、相互比較を可能にする工夫を行なっている点も重要である。複数の地域でフィールドワークを行なう場合、偶然的事情による情報の偏りが生じないようにするため、できるだけ斉一的な情報を収集するよう努めるというのは当然のことではあるが、研究対象たるロシアが最近までフィールドワーク遂行が思いもよらなかった国であり、今なお多くの困難な条件を抱えているということを思えば、これは非常に高度な達成である。

第三に、上記のような課題設定およびフィールドワークの成果として、いくつかの重要な発見がもたらされている。たとえば、①従来、旧体制エリートが移行の「勝者」だということが自明視されがちだったが、実は、地方行政府は「行政の撤退」に伴う住民の不満を回避するという困難な課題に直面していたのであり、そのことが地方政治の複雑な曲折の背後にあったという指摘、②「統一ロシア」の圧倒的一党優位状況成立は、制度的集権化のストレートな貫徹ということだけで説明し尽くせるものではなく、むしろ地方政治エリートがそれぞれに独自の思惑をもって与党に合流したことの結果的産物であること、そしてその後も、地方エリートの競合関係が「統一ロシア」の中に持ち込まれたために、同

党は一枚岩となることができず、意外な弱点をかかえているとの指摘、③結果的にどの州でも「統一ロシア」が優位を確立したという限りでは各州に共通性があるが、そこに至るプロセスの具体的経緯やその後の変化には州ごとの差異があり、ロシア政治は圧倒的一党優位状況下でも全面的に斉一化されてはいないとの指摘、等である。

もっとも、本論文にはいくつかの短所があるということも指摘しないわけにはいかない。

第一に、分厚い描写に比して、圧倒的一党優位状況成立のメカニズムに関する一般論については、いくつかの興味深い事実を抽出しているものの、完成されたモデルを提示するには至っていない。また、民主化（およびその失敗）の研究など、ロシア以外の国を含めた比較政治理論にどのような含意があるのかについても、簡略な問題提起にとどまり、具体的に展開されていない。

第二に、文章は概して明快であり、読みやすいが、部分的に十分練られていない箇所もいくつか残っている。そのことは、分析が手薄だという上記の印象をさらに強める要因ともなっている。

しかしながら、これらの短所は本論文の価値を大きく損ねるものではない。第一の短所について述べれば、この欠点は、フィールドワークを通してあまりにも多彩な情報を手に入れた結果、一般化された結論を出すのが難しくなったという事情による面もあり、実証における成果の副産物という側面がある。また、不用意に大胆すぎることを言わないという学問的禁欲の反映でもあるが、そのような姿勢自体は肯定的に評価されるべきものであろう。ロシアでは近年までこのようなフィールドワークが不可能であり、今なお困難な条件下にあって、地方政治に関する実証的データの蓄積が不足しているという現状に鑑みて、実証研究に当面の力点を置くことは合理的な研究戦略と考えられる。

以上から、本論文は、その筆者が自立した研究者としての高度な研究能力を有することを示すものであることはもとより、学界の発展に大きく貢献する特に優秀な論文であり、本論文は博士（法学）の学位を授与するにふさわしいと判定する。